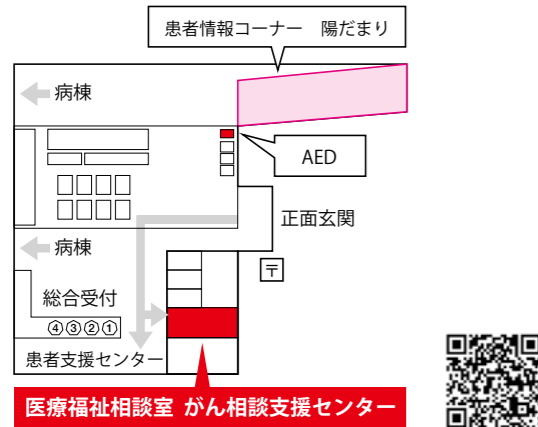


物忘れ 相談窓口のご案内

認知症・せん妄サポートチームでは、認知症、せん妄の患者さんやそれらに関連する不安やお困りごとを抱える方のご相談をお受けしています。

医師、看護師、薬剤師、ソーシャルワーカー、心理士、栄養士と様々な専門職がその支援にあたっております。このようなお困りごとがある患者さんがいらっしゃいましたら、当院の「医療福祉相談室」お気軽にご相談ください。



## 認知症・せん妄 サポートチーム

お薬を飲んだか 思い出せない 管理が難しくなった  
趣味や楽しみに 関心がなくなった  
認知症があり 生活に困っている

**をご存知ですか？**

当院には、診断を受けているか どうかに関わらず、認知症やせん妄、 それに関する課題や不安を抱える患者さんやご家族を支える専門チームがあります！

医師 (脳血管内科医)	患者さんの病状や治療との関係、身体の変調、薬剤の影響など総合的に判断し、主治医と連携してサポートします。
看護師 (認知症看護認定看護師)	患者さん・ご家族のこれまで生きて来られた生活史を尊重し、不安やストレスを少しでも軽減して、安心して過ごすことが出来るように一緒に考えます。
薬剤師	薬剤による副作用や相互作用をチェックし、それぞれに適した薬物療法を行えるよう提案します。
ソーシャルワーカー	社会福祉の立場から、患者さんやご家族の抱える経済的・心理的・社会的等、生活に対するお困りごとに対して一緒に考えています。
栄養士	必要な栄養が摂れるよう、食事の工夫や補助食品等をご紹介します。
心理士	お話を聴きしたり、必要に応じて心理検査等も行いながら、患者さんやご家族それぞれが抱える問題と一緒に取り組みます。

**相談窓口 (医療福祉相談室)**  
上記のお困りごとがありましたら、医療福祉相談室にお越しください。まずは、ソーシャルワーカーがお話を聞かせていただき、必要に応じて専門のスタッフと調整もさせていただきます。

ハートコール導入のお知らせ

4月よりハートコール(循環器疾患の専用直通ダイヤル)を設置致しました。救急隊や地域の診療所、病院から直接、循環器科医師に繋がる回線を設けることにより、24時間体制で緊急対応を要する循環器疾患(急性冠症候群・急性心不全・頻脈性徐脈性不整脈など)を迅速に受け入れ、救命率の向上を図ることを目的としています。詳細につきましては当院の地域医療連携室(0721-50-4415)へお問い合わせください。

大阪南医療センター 循環器疾患センター

胸背部痛、呼吸困難、動悸等 循環器疾患が疑われる際には 緊急対応連絡先へご連絡ください

**24時間緊急対応**

大阪南医療センター 循環器疾患センター

広報誌「南窓」のご意見・ご感想をお聞かせください

広報誌「南窓」をお読みいただき、誠にありがとうございます。

お客様一人ひとりの声をより良い広報誌作りに活かしてゆきたいと考え、ご意見・ご感想を募集しております。

皆様からのご意見は、今後の改善を進める上で参考にさせていただきます。上記のURL または QRコードよりフォームにアクセスが可能です。

※ご意見・ご感想への返信はいたしておりません。ご了承ください。ご意見全てにはお答え出来ない場合がございます。予めご了承ください。

<https://contact.osakaminamihosp.jp/>



診療科 NOW 腎臓内科



早期発見・早期治療につなげるべく

よりよい連携関係をさらに発展させましょう

あんどう ゆたか  
腎臓内科医長・血液浄化センター医長 安東 豊



「腎臓内科の動画はこちら」

検尿異常を認めたら なるべく早期に「腎生検」を

当院の「腎臓内科」では、慢性糸球体腎炎のほか、高齢化に伴う高血圧、糖尿病など生活習慣病やリウマチ・アレルギー疾患に合併した腎障害の患者さんが多いのも特徴です。そうした患者さんに対してそれぞれの専門医と連携を密にしながら、お一人お一人に応じたていねいな治療を実践しています。また腎臓移植をご希望の方には然るべき施設をご紹介します。

ご存じのように、慢性の腎臓病はじわじわと悪くなり、ある基準を超えてしまうと人工

透析療法が必要となりますので、何よりも早期発見・治療が重要です。一般的に腎障害は尿検査をきっかけにわかることが多いですが、反面、自覚症状が乏しく、病気に気づかないまま長期間を過ごしてしまうケースが大半を占めますので、開業医の先生方には、血液検査・尿検査で腎炎が疑われる場合は、特に比較的若い患者さんであれば、速やかに当院への紹介手続きを取っていただき、患者さんには腎臓の組織の一部を採取する「腎生検」を受けていただくのが最善と考えます。

きちんとした診断が出れば、タイプにより、経過観察、薬物療法などを検討します。経過観察では、生活指導はもとより、栄養士を交えてご自宅での食事療法をサポートしています。

治療については当院で継続することもあれば、かかりつけ医の先生にお戻りするケースもありますが、情報共有も含め、こうした連携がスムーズに行われていることは、患者さんには大きなメリットといえるでしょう。



## IgA 腎症における「扁桃パルス療法」も積極的に

慢性糸球体腎炎の中でも「IgA腎症」は日本人に最も多く発症する病気で、この治療が大きな課題といえます。成人の場合、軽度であっても、「20年で40%前後が腎不全に至る」ことが報告されていますので、やはり早めの対処が必要不可欠です。

治療としては経過観察、降圧薬や抗血小板薬などの薬物療法のほか、将来、進行する確率が高いと判断した場合、「扁桃腺摘出術＋ステロイドパルス療法」を積極的に行っています。異常なIgAの発生源となっていると考えられる扁桃腺を摘出し、その手術を

行ったあとに、糸球体の炎症を抑制するためのステロイドパルス療法を行うもので、重症度にもよりますが、7～8割は進行を抑えられることがわかっています。

## 「腎透析」医療の拠点病院として患者さんに寄り添う

次に人工透析療法についてですが、現在、外来での血液透析の患者さん30数名と腹膜透析の患者さん20数名がおられ、毎年50名前後の新規の患者さんを当院で透析導入しています。血液透析では、当初は当院で様子を見て、ご希望により、なるべくご自宅に近い施設をご紹介しますようにしています。

血液透析と腹膜透析は、患者さんが自分に適したほうを選択することになります。患者さんの声を聞きますと、血液透析は専門の施設で専門のスタッフがいますので安心とおっしゃる方が多いですね。腹膜透析は患者さんご自身が自宅で行い、定期的に診察に来ていただく形式ですので、現役世代や自分の時間を大切にしたい方に適していると思います。体への負担も腹膜透析のほうが軽いと思います。このようなメリット、

デメリットを、患者さんの声に耳を傾けつつ説明を重ね、ケースによってはすでに治療を受けている透析患者さんとお話ししていただく機会を設けるなど、できる限り患者さんの不安を取り除くよう心掛けています。

また透析中の工夫として、体力増進と気分転換のため、自転車漕ぎなど足の運動やチューブを使った全身の運動を採り入れています。

今の血液透析は、透析機の性能がよくなり、昔に比べて長生きされる方も増えています。具体的には、老廃物など余分なものを取り除く透析膜の性能が向上、水処理装置も品質が良くなって、透析液を作るために必要な水もより清潔になり、より良い透析ができるようになっています。今後も改善、進化が見込まれるでしょう。

しかしながら、これを回避できるのに越したことはありません。私たちは早期発見・治療につなげるべく、登録医の先生方との今よりよい連携関係をさらに強化し、推進したいと願っています。



患者さんの命を守るため

## 職員一丸となって医療安全に取り組む

副院長／医療安全管理室長／患者総合支援センター部長  
骨・運動器疾患センター部長／骨・運動器疾患研究室長

おだ たけのり  
小田 剛紀

「医療安全管理室の動画はこちら」

看護部長・医療安全管理係長  
おがた まゆみ  
尾方 真由美

やぶ とよあき  
専門職・医療相談係長  
藪 豊彰



## 現場重視のシステムを運用

小田 「医療安全管理室」には医師、コメディカル、看護師、事務等を含め延べ49名が参加し、この3名が中心となって情報収集とその分析、対策の立案、マニュアル作成等に取り組んでいます。医療安全を実現するには個々の技術を上げることはもちろんですが、「人は間違う」という前提のもと、間違いが起こってしまったときに別の者がカバーできるシステムを構築し、それを有効活用することが肝要です。当管理室では、一人一人の安全意識を高めること、全職員が一丸となって質のよい医療を提供することを最重要視したシステム運用を実践しています。

たとえば組織としては、現場ラウンドと実務レベルでの改善に取り組む「医療安全検討部会」があり、例会でその月の連絡事項を確認し、そこから各現場へ確実に伝達できる体制となっています。さらに現場での対応が難しい場合などに調査・検討、改善策の企画・立案を担う「医療安全カンファレンス」、新たなルール作りをする際に検討を行う「医療安全管理室会議」、幹部による最終的な



意思決定の場「医療安全管理委員会」を設置。現場の声を聞き上げ、改善策を全職員でしっかりと共有し実行に移し、患者さんの安全のため万全を期しています。

## 院内連携と地域連携を実践

尾方 私は主に、問題が発生した現場での情報収集、インシデントの把握・分析を担い、医療安全研修などを実施しています。

当院の医療安全活動には全部門の現場レベルのスタッフが参加。さらに医療安全検討部会を「転倒・転落」「確実な確認行動」「診療記録」「インシデント改善対策」「静脈血栓症リスク評価」と5グループに分け、全部門の現場レベルのスタッフが参加し広い視点で医療安全対策を考えることができているのが特徴です。また面会の難しいコロナ禍、

「コミュニケーション」も重要項目とし、病棟では、ご家族が荷物を持って来られたときなどに積極的に患者さんの様子をお伝えするなど、これまで以上の配慮を徹底するようにしています。

藪 私は院内でトラブルが発生した際の事務の相談窓口であり、患者さんサイドとの折衝や訴訟の準備なども担当します。

当院の医療安全対策で「南河内医療安全ネットワーク」がとても有効だと感じています。南河内二次医療圏における同規模の9病院と相互チェックラウンドを行うなど各病院における課題の発見やその改善策を共有。コロナ禍でもインターネットで連携を推進しています。国立病院機構として全国的なネットワークを有していますが、地域の患者さんの特性もあり、困ったときに気軽に相談できるのも利点だと思っています。